

聖書：創世記 17：1～14

説教題：割礼の契約

日時：2023年8月6日（朝拝）

創世記第17章は「さて、アブラムが九十九歳のとき」と始まります。直前の16章16節に「ハガルがアブラムにイシュマエルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった」とありました。アブラムが信仰の歩みに出発したのは75歳の時でした。「あなたを大いなる国民とする」との約束を受けましたが、なかなか実現せず、アブラムは待ち切れなくなって前の16章で女奴隷ハガルを通して子どもをもうけました。その結果、彼の家には大変な災いと苦しみが生じました。その時から今日の章までに何と13年が経過していました。私たちがアブラムだったらどんな状態になっているでしょう。もうすべての望みは潰えたという状態でしょうか。何も起こらずに自分の人生は終わった！子が与えられる話などもはや現実的ではない。あと一年で100歳に達するという状況となっていました。その時に主が現れて約束実現に向けてついに具体的なことを語られたのです。ここから人間的に望みが持てなくなったら神の約束実現もなくなるのではないことを教えられます。むしろ人間的な望みが全く消えた状況で神の約束が力強く実現して行く様を私たちは見るのです。

主はまず言われました。「わたしは全能の神である」。神に不可能なこと、できないことはありません。神はこれから約束を実現されます。その恵みにあずかるために「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われます。神が全能者で恵み深い神であるということは、私たちが何もせず、ただ傍観していれば良いということにはなりません。この神に信頼する者として、あなたはわたしの前に歩め！と言われます。自分はいつも神の目の前にあること、神が後ろから見守り支えていてくださることを覚えて歩むということです。「全き者」とは神に対して誠実であることです。半分主を信じ、半分他のことに心を寄せる二心ではなく、主にこそ信頼し応答する歩みへ進むことです。

主は「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる」と言われます。すでに15章で主はアブラムと契約を結ばれました。神は引き裂かれた生き物の間を通り、ご自身が約束を守る方であることを証ししてくださいました。あの契約と別の契約がここで立てられるわけではありません。これは15章で見た契約のリニューアル

です。特にここで主は契約のしるしを制定されます。そしてさらに新しい内容も明らかにされます。

その新しい内容の一つは、4 節にある通り、「あなたは多くの国民の父となる」ということです。これまでは「あなたを大いなる国民とする」と言われて来ました。一つの国民を作り、それを偉大なものにすると。しかしここでは「多くの国民の父」と言われています。この後を見ると、たとえば 25 章から、ミディアン人などいくつかの国民はアブラムから出たことが分かります。また同じ 25 章にはアブラムから出たイシュマエルの 12 人の氏族の長たちのことが記されます。こちらはいわゆるアラブ人のことです。あるいは創世記 36 章に記されるエサウの子、エドム人もアブラムから出た民族の一つです。もちろん中心は神の民イスラエルでしょう。しかしここは単にアブラムが文字通り色々な国民の父となることだけが言われているのではなく、将来アブラムが信仰の父として、世界各地に広がる色々な国民の信者たちの父となるという意味も含まれているように思われます。この新しく明らかにされた約束とセットでアブラムは新しい名を主からいただきます。それはアブラハムという名です。アブラムは「高貴な父」という意味ですが、ここで「多くの国民の父」という意味のアブラハムに名を変えられます。名は体を表すと言われます。アブラムは今後アブラハムとして多くの国民の父となるのです。そして 6 節には「王たちが、あなたから出てくるだろう」と言われます。それぞれの国民で王が誕生することになるでしょうし、神の民イスラエルもそうでしょう。それとともにやがて真の王であるメシアがアブラハムの家系から出るという暗示もここにあると考えられます。

そしてこの契約のエッセンスが 7 節に語られます。「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」 神は彼らに何かを与えるだけではなく、ご自分を与えられます。わたしは「彼らの神」となると言われます。彼らの神と呼ばれることを恥とせず、彼らと特別な契約関係に入り、彼らを保護し祝福してくださるのです。その具体的な現れとして 8 節に、カナン全土をあなたとあなたの後の子孫に与えると言われています。

さてこの主の宣言を受けて、9 節以降はアブラハムの責任について語られています。これまでの主語は神でした。神は「わたしは」「わたしは」とご自分を主語にして語っ

て来ました。2 節も、5 節も、6 節、7 節、8 節も主語は「わたし」でした。つまりこれらは神がしてくださることを語ったものでした。それに対して 9 節以降の主語は「あなた」あるいは「あなたがた」になっています。9 節は「あなたは、わたしの契約を守らなければならない」と始まり、その後の 10 節、11 節、12 節も主語は「あなた」または「あなたがた」です。つまり神と契約関係にある民にはなすべきこと、果たすべき責任があるということです。

特にここで求められたことは割礼です。自分の包皮の皮、男性性器の皮の一部を切り捨てることです。これは当然血を観ることになりますし、相当な痛みを伴う出来事になります。この割礼はアブラハム以前にもある国々では行われていたようです。ある民族では衛生的な目的から、ある民族では成人に達した時の通過儀礼として、あるいは結婚前の儀式として。しかしここでは契約のしるし、すなわち神と契約関係にあることを確証する証印としてこれを行うようにとされています。すでに主との契約は 2 つ前の章の 15 章で結ばれました。しかしアブラハムは次の 16 章で失敗しました。ある意味で信仰があれば良いのです。信仰が大事です。しかし弱い私たちは「信仰」「信仰」と言うだけでは心許ないものです。そういう私たちの弱い信仰を支えるための補助手段として、神はこの目に見えるしるしをくださいました。この割礼という契約のしるしは、13 節にあるように彼らの「肉」に、つまり彼らの体に刻まれます。ですからそのしるしは一生涯、自分の肉の上にあります。彼らはこれによって自分たちは主の民とされた者たちであることを常に思い起こさせられるのです。そしてこのしるしをくださった主に信頼して歩むようにと強められることになるのです。

このしるしは誰が受けるべきなのでしょう。それはアブラハムだけではありませんでした。10 節に「あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい」とあります。この家に属するすべての者を神はご自分の民として一人一人にそのしるしをくださるのです。ある人は女性は？と思うかもしれませんが。女性は契約の中に入れられないのかと。もちろんそうではありません。これは契約関係の代表的性格によることです。その家の男子が受けることによって、その家の女子も契約の民とされます。

そして注目すべきは子どももこの契約の民の一人とされることです。今日の 17 章には繰り返して「あなたとあなたの後の子孫」という表現が出て来ます。12 節には具体的に「生まれて八日目に割礼を受けなければならない」と言われています。大人に

なってからではありません。その意味が分かるようになってからではありません。まだ子どもの内にです。その彼らも神はご自分の民とし、契約関係にある者としての祝福に生かすとされています。またその家で生まれたしもべも異国人から金で買い取られた外国人とも言われています。他国出身の者でも、主を主とする家で主の主権に服して生きる人である限り、神の民とされると言われています。

しかしこの割礼のしるしを受けない者、それを拒絶する者は断ち切られると最後の14節にあります。その人はわたしの契約を破ったと言われています。この割礼というしるしを受けないということは、主が与えてくださっている契約関係を退けるということであり、それは主ご自身を拒否することです。その人は自ら自分を神の民ではないとするわけです。本来、神の民の祝福の中にある者だったのに、自らその特権を投げ捨て、主を捨て、契約の祝福の外に出て行ったこととなります。さてアブラハムがこれにどう応答したかは次回17章後半で見ることとなります。

以上の箇所は今日の私たちにどのように適用されることでしょうか。今日の箇所が今日の私たちに俄然意味を持つのは、ご存知の通り、旧約時代の割礼に対応するのは新約時代の洗礼であることを押さえる時です。どちらも神の民となるための入会儀式に当たるものです。またローマ人への手紙4章9～12節を参照したいと思います。ここは信仰義認について論じられているところですが、特に11節に割礼について「信仰によって義と認められたことの証印」と言われています。しばしば割礼はイスラエルという旧約時代の一国家の民族的なしるし、肉的なしるしと見られることがありますがそうではありません。ここに第一義的にそれは信仰によって義と認められたことの証印という霊的な意味を持つしるしと言われています。パウロがこのローマ書4章3節で引用しているように、創世記15章でアブラハムは信仰によって義と認められました。その霊的状态が先です。それを確証するしるしとして今日の17章で割礼が与えられました。洗礼も同じです。洗礼も信仰によって義と認められたことのしるし、証印です。コロサイ人への手紙2章11～12節でも割礼とバプテスマが並べられて同じ意義を有するものとして語られています。今日は詳しく見ることはできませんが、旧約では神の民とされたしるしを受けるために「割礼」という血を流す作業が必要とされましたが、新約の洗礼ではそれが不要になりました。これはキリストの十字架上での血による贖いが成し遂げられたことと関係があると思われまます。また旧約では男子のみがこのしるしを受けましたが、新約では女子も受けることができるものになり

ました。これは新約時代における一層の恵みの拡がりという特徴にふさわしいものとなっています。今日ここで覚えないことは今日の洗礼は旧約時代の割礼と同様、神の民・神の教会の一員とされていることを目に見える形で指し示すものであるということです。アブラハムは肉の上にはいわば神のスタンプを受けました。洗礼も神がくださったスタンプです。これは私たちが一層信仰に堅くとどまることができるように神がくださった恵みの手段です。私たちの弱い信仰が支えられて、神との特別な関係にある民とされていることをいつも確信し、強められるための神の恵みと配慮に満ちた方法なのです。

もう一つ今日の箇所から学ぶことは神は家族を考慮されることについてです。主はここで信じた大人だけ、神の民のしるしを受けよとは言いませんでした。「わたしはあなたとあなたの子孫の神である」と言われ、ご自身の民に子どもたちも含めておられました。新約聖書のガラテヤ人への手紙3章で、今日キリストを信じる私たちはアブラハムの子孫であると言われていました。アブラハムは「わたしはあなたとあなたの後の子孫の神である」と言われる神を信じて、その子どもたちと一緒に契約のしるしを受けました。なのに今日の私たちがこれを大人にだけ適用して、子どもはそこから切り捨てるとしたら、それは私たちがアブラハムの子孫であるということにならないのではないのでしょうか。アブラハムの信仰とこの点で異なる信仰に立っていることにならないのでしょうか。今日の個人主義的な考え方に慣れている私たちにとって、この聖書の考えは奇異なもの、あるいは古いものに感じるかもしれません。しかし家族という制度を定めたのは神です。神は墮落後もこの制度を投げ捨ててはおられません。むしろこの家族という制度を大事に見て、これを用いてみわざを行おうとされる主のお姿がここに 있습니다。一人を救うことを通して、その家族も特別な恵みの中に入れ、導いてくださいます。このアブラハムにおいてはっきり示された方式が撤回されたという暗示は聖書のどこにもありません。神のお考えは今日も同じです。神は永遠に変わることがありません。そのように扱ってくださる神に信頼して信仰生活を歩むように！というのが聖書の教えです。このアブラハムと同じ信仰に立つことこそ、アブラハムの子孫のあるべきあり方なのではないのでしょうか。

信仰によって義と認められても、99歳となり、なお戦いの中にあつたアブラハム。神はその彼がなお神に信頼を置いて信仰の道を歩み続けるようにと契約のしるしを与えてくださいました。それを子どもたちにも施して、子どもたちもひっくるめて恵

みの中で扱ってくださる神に信頼して歩むように！と。今日の私たちも色々と先行きが不透明な毎日の中で、どこに基礎を置いて歩むべきでしょうか。人間的に望みが持てないような状況に至った時、自分に関して、また自分の子どもたちに関してどこに希望を置いて歩んだら良いでしょうか。その答えは私たちと契約を結んでおられる神に！です。主は「わたしはあなたの神、またあなたの後の子孫の神となる」と言ってくださっています。そしてそのためのしるしを持つようにと命じてくださいました。私たちは感謝してこのしるしを受け、一層この神により頼む歩みを強められたいと思います。どのような状況に今あるとしても、私と私の家族の希望は私と私の家族の神となると言ってくださっている主にあります。この契約関係を感謝をもって告白し、主にお従いする中で、主が必ず現してくださる豊かな恵みと祝福に生かされる者へと導かれてまいりたく思います。